海嶽莊詩囊

特259
869

始

海嶽莊詩囊

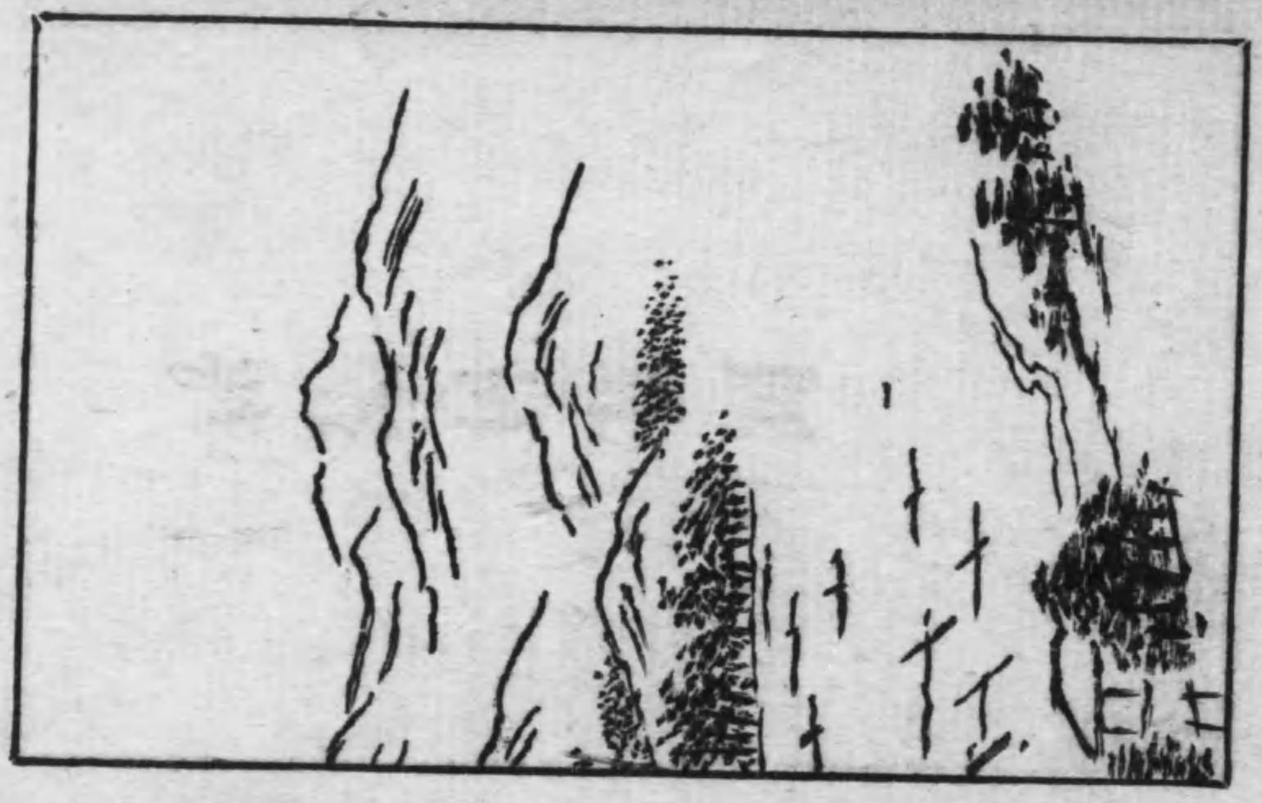
特259
869

特259
869

帝國圖書館藏

海嶽村莊圖

昭和三十六年 内務省圖書



右金陽畫史。大和五條人。來住于金城。
爲余四十年來莫逆之友也。一日來遊
于村莊。後寫此圖見贈。因刻載之卷首。

松下老人識

海嶽莊記

犀水之西。鯤溟之東。古之大安野也。有村曰藤里。予之所出也。其西有支村。細川流焉。度橋而北折。沙丘起伏。群松成林。距海七八丁。其半爲村有。昨春村老相謀分割。予所得數百步。其中瀕于川者二百步許。一日檢其地。有三面松匝。一面東開者。宅區自成。臨眺空濶。遙見加越飛之連峯。意太愛之。乃招村匠。構一草亭於其中。佃夫來助。不旬日而成。其廣方數楹。今玆更加

一室。柱埋砂中。而不礎。壁貼敗紙。以不圬。二室三窓。庵圃并焉。前爲塲圃。後爲林園。移松種菊。日涉成趣。衡門竹扉。設而不扃。其北有一小丘。丘下泉出。冬温夏清。終古不涸。水近而土潤。陽開而蔬肥。予往來信宿。不知老之既至也。蓋開窓則天山雄嶽。縹渺千霄。如雲烟。如波浪。朝靄夕霏。變幻隨時。而金城萬家。蜿蜒環乎其下。顧西則滄海一碧。雲鳥煙帆。隱見乎林樾間。偶遇月夕。玉盤轉乎山上。晴光千里。虛室生白。近焉幽芳凉蔭。遠焉黃雲白雪。四時之景不同。而主人之樂同焉。鉛槧稍倦。則褰裳而出。伐榛芟蕪以拓地。種蘿蔔。藝蕃薯。或拾人所棄。雜栽簷下。使花卉四時不絕。村父時至。農談至晡。燒松葉以吹火。摘蔬煨芋。茅柴自酌。話久而返。入夜。羣動息而無人。松聲歇而潮音高。樹影參差。月落前川矣。此地無電燈。故剪燭以讀書。眼光烱然。却增精爽。地高而野曠矣。故天明最早。乃晨興汲水。嗽口濯體。升而望海潮。下以撫松竹。噓吸

養和滌蕩蓄精奚婢供餐則白梅湯一盎脫粟飯三椀閑步于草徑花塢間或出古法書焚香觀之或插野花對桂軸默坐良久之至夏日北窓引風偃蹇寄傲仰聽禽鳥之和鳴及七八月之交去浴于蒼波咏而歸夕陽西傾乃臨蘆渚以挹煙波釣徒之致矣凡一丘一壑娛老之具備焉所以忘老之至也梁陶隱居性好著述惜光景終與物絕築樓於松間但一僮侍其旁常聞松風欣然自樂號七松居士是予之常所私

淑而居亦相若矣宋米元章號海嶽予非踏其號也顧年壯投鋤犁以事一經兒纔二人而紙孫年加多焉筆删終日身不生病而卜隱於此以時々來往於人間是皆賴父祖海嶽之恩矣既承父祖海嶽之恩矣而縱海嶽之大觀所以命于莊也且夫鳥飛返鄉思舊巢也狐死首丘不忘自生也予今年七十東西南北鴻跡遍海之內外育英無効興盡而歸求適忘履反已遺世乘士之常待命之終復何思何慮乎康成子

有言。百昌生於土。而反於土。吾將去入無窮之門。而遊無極之野矣。予向住洛之野。有取于此。今復以扁於門。蓋大安野。無極之野也。等身之著無窮之門也。亦是相攸優遊之意焉爾。乃記以貽子孫之主此莊者云。昭和二載丁卯清和月朔草。松下老人

海嶽莊詩囊

藤里途上

平田水滿四呈白。遠嶺雪消日露青。回首西溟雲脚疾。鳴蛙聲裏雨冥々。

今年寒暑失時調。四月花間飛霰跳。一路行看農事晚。先呼村老問場苗。

莊成有此作

三面栽松々作隣。松風聲裏讀書親。倦來一睡松花落。起掃滿庭松下塵。

歸隱本非期。瓦全。人生誰復願。睡仙。舊廬地外幾千畝。更有筆耕未了田。

萬松屏裏是吾家。三面開窓坐煮茶。落日山前何所見。白雲一片逐歸鴉。

五絕十五首

海嶽莊始成。無窮門恒扃。此中無定主。誰作草堂靈。

結竹以爲扉。埋柱不須礎。門墻惟設耳。來者不曾拒。

板壁四貼紙。芋園半結籬。村翁兩三輩。相喚共傾巵。

沙丘清泉湧。菜圃野渠徐。可以灌吾足。可以煮吾蔬。

百舌隨時至。朝々破曉鳴。曾稱嗜々子。白首憶孩嬰。

蚯笛和蛙鼓。聲煩而不煩。人知人籟好。不知天籟尊。

丘上銀河近。松陰瓦燭明。梟鳴聲若喚。夜々傍

廬鳴。
晨興立長嘘。胸底一塵虛。木石両相伴。蕭然是我廬。
合歡花若笄。日午綠陰繁。此間唯有此。三伏貴丘園。
隔野山千疊。窓前無礙看。誰言容膝窄。却覺曲肱寛。
步出風煙上。閑凭落日亭。鳥盡水天遠。雲飛一嶽青。

羣松交翠密。不復訴孤單。啼鳥來呼我。閑花袖手看。
萎禾應起綠。凋樹既回青。甘澤夜來雨。滴聲夢裏聽。
林動清風至。雲飛白雨來。歡聲四方湧。生氣一時回。
雨晴起白雲。夏至聽新蟬。風物不違節。人間却愧天。

犀堤

江干幾來往。落日遠林銜。近市鐵橋在。一線劃仙凡。

贈村翁

浮沈六十歲。玆始共銜杯。不知保殘骨。交歡得幾回。

五絶九首

鳥雀遶簷樹。臨終何處移。不知齡幾許。地上竟無屍。

一夜秋風起。禾黍若奔波。窓前青一面。此處我田多。

隨分應知止。古人偏戒貪。蒼蠅來授首。是亦爲叨婪。

衡茅無長物。隨有復其初。不足無不足。有餘無有餘。

草玄々愈白。何暇釣香魚。邈矣二千載。子雲獨似余。

觀音又達磨。總是無用物。把置之牀頭。以爲玩弄佛。

苦晴急鑿井。得雨惜投賚。天意元公道。人心乃有私。

屋上松聲落。堦前夕日長。虛軒簾影動。閑榻帶微涼。

皮裏逐年瘦。光陰似夢中。朝來秋氣冷。土王四番風。

松下居

吾愛松下住。來結松下居。閑步松下路。松風吹衣裾。日夕松下讀。松花落如梳。月來散清影。松陰夜窓虛。自喚松下老。人亦認吾廬。七松居士後。似者無乃余。

中庸

中心元天理。儒教說中庸。剖判神靈出。其名既執中。

歸金府

海村十里夕陽微。蝙蝠双々掠面飛。白髮老翁猶可用。一斤草餅手携歸。

秋日

野叟入園手自培。村童集社去徘徊。紫羅傍水無人見。獨向秋風自在開。

浪聲

勇猛精神身是牲。莫言愛靜慰斯生。請君有意試來宿。晝聽松聲夜浪聲。

老婆

故村有老婆。獨居在僻陬。客問不勝寂。笑言有何幽。蚯吟蛙鼓天然曲。却恠世人絲竹囚。

偶題

化而成灰竟若何。萬般粧点屬娑婆。把爲清玩亦何妨。木窟觀音石達磨。

七月十三日掃墓

滿地白茅紛不分。更看葛藟不勝焚。多年漂泊託無主。泣掃祖先三尺墳。

晚望

舊村多水稻粱肥。更喜今年歲不飢。日暮青田人去盡。滿天蝙蝠入雲飛。

觀月

登丘待月升。宛如月下僧。茫々乾坤裏。灝氣入秋澄。天上月無伴。地上我無憑。我看月爲友。月照我爲朋。影明滅星漢。更深寂一燈。松下冷露落。心頭清似冰。月轉雲間入。我亦久不勝。相別松下臥。衾枕夜煙凝。

書感

男兒涉險匪徒遊。辛苦慣來志始酬。俗子登山心已誤。芙蓉峰上酪漿求。

大鳳一飛羣鳥隨。君相由來億兆師。堪惜周家喬太子。緱山乘鶴入雲遠。

觀月歌

壬戌既望在異鄉。今年歸臥海嶽莊。莊是墨子安樂窩。偶載酒來値既望。七十二峯白雲收。萬里滄溟轉蒼涼。玉盤擎出雲間月。直射乾坤一草堂。草堂無客拾句過。獨倚簾櫳傾一觴。醉至徘徊踏松影。一牀携去上沙崗。一天寥廓望茫々。身似廣寒宮裏翔。脚下蟲聲冷於露。樹間江影白如霜。月到中天不吟盡。惟覺清宵幽味長。

君不見。古人翫月賞心在。今人徒學少年場。有情無情古今變。感慨一腔詩滿囊。

口占

劍山刀樹幾回躋。興盡歸來雨一犂。夕折柴薪朝汲水。松陰沙上拾詩題。

夜入村莊

雲消月出半輪明。人絕露濃夜氣清。左折右廻松下路。秋叢深處踏蟲聲。

所見

故村是何夕。秋社鼓聲舒。童子兩三輩。板橋坐讀書。

偶感

七百年來羣小雄。視民如草互相攻。漫稱四種元二種。武士出農商出工。

晚眺

東窓開處耐開胸。木末青山雲萬重。誰識萬重雲霧外。巍々纔認兩三峯。

十七日。雨中獅子舞

風雨朝來捲地吹。郊頭躍出百花獅。三絃彈破老歌妓。一棒衝披少健兒。血氣橫秋勢難制。清樽祭社醉何辭。謝君遠到村莊地。拍手舞終祝萬斯。

雲谷等的畫布袋騎渡圖。賦贈音氏。

巨囊戴頂若騎風。兩眼朝天脚踏空。方外欲知世情險。借驢萬里渡長江。

晚到莊

雨晴海澨尚留風。一道潮聲響西東。今夕不迷江上路。蘆花淺水月明中。

晚望

臥龍峰上是何燈。想見氈棚氣若蒸。憐殺逐涼却追熱。不知山外別藏氷。

逢故人

到處逢故人。舊情一堪喜。顧語其兒曰。此我村夫子。

晚步

去向江村無点埃。胸中唯覺一時開。此間猶是

小春候。既見連峰白雪來。
西望西天不見山。却起奇峯暮雲間。忽看落日
赤如火。遙向林頭掛巨盤。

讀易

來往人間唯一屐。不須上下排虛翮。青溪道士
定前身。深鎖松門讀周易。

裕堂問耽讀之書。賦此以答。

詩書易左氏。魯論最深沈。韓柳陶李集。代醉並
鶴林。此餘鄴家富。耽讀付書淫。

述懷

頹齡薄西山。文章不堪删。況自喪老婦。日夕不
得閑。野處非無故。飛鳥倦知還。勿咎往來闕。須
憐木石頑。息交親燈火。絕游掩松關。只願從所
欲。開籠放白鵰。

安原川

數級釣磯崖樹邊。風蘆如竹掩桑田。俯看軒下
潺湲水。亦是吾家小渭川。

十七日夜大雨

日暮雲晴月色催。何圖中夜雨如摧。橫吹縱打
簷如瀑。傾倒北溟怒浪來。

刈稻

老來秋至感尤多。千畝稻雲變若何。青變化黃
々化白。一年節物夢中過。

黃櫨

好晴連日近來稀。夾岸黃櫨依舊緋。物換星移
無客賞。蕭條落日向熹微。

改建先塋

村頭冐雨入三昧。所嘉改理祖先累世墳。殘石無
餘無不足。香花一束暮風熏。

雜詩

村莊經日至。風雨捲空來。于喝力如割。激謌勢
似摧。晨起荷鋤出。赤脚下丘隅。汲水洗塵器。吹
火起寒灰。苟無水火二。百事不得裁。大機大用
在。造化無盡財。

秋老農收畢。郊墟不見煙。一望淨如掃。蘆花偃
野川。寒禽飛不度。枯坐轉蕭然。此間多恒產。主

人不知田。

黑風動滄海。白雪滿連山。野濶行人少。天高飛鳥還。村翁携土卵。冐雨叩松關。對坐斟沽酒。農談日夕閒。素懷無俗韻。隨處有仙寰。不必擇所住。々在不住間。

對雨

濕雲漠々翠濤飄。炭火起時幽味饒。一瓣梅香一甌茗。窓前樹下雨蕭々。

夜坐

耽書誰謂毀殘生。獨坐闌更對短檠。既慣海音不知聒。還聽飛霰撲窓聲。

夢中得一絶

堪笑世人畏外患。內憂却見恒親間。康寧別有泰平鳴。不用鞍頭一顧盼。

答人二首

高人無別技。觸物自生奇。後世爭人作。終忘天造詩。

秋風吹渭水。落葉滿長安。此句何如會。高人吟

不酸。

丁卯三月十七日。夕到村莊。途上作。

雪白暮山淡。煙青遠樹濃。眼中自春色。和氣送殘冬。

仲九在莊。朝雪至。雜咏

身在市居中。口吟銀世界。世界變爲銀。元是不在隘。處高騁遠眸。茲始見清快。一白無江山。萬樹吐沉瀣。潮音和松聲。几案響澎湃。此中自有詩。此處便成畫。把筆寫性靈。避世償文債。有人

斫路來。圍爐交情話。点紅轉俗流。對白入清派。請見方寸心。何處着纖芥。

雪至鎖天地。山動逼窓前。鳥盡人蹤絕。壺傾醉客眠。

雪浪捲沙岸。震驚松下居。袁安呼不起。門外積尺餘。

一茅海嶽間。宛如林下寺。扉横夜不關。積雪沒芒屨。唯有浩濤鳴。來入松聲去。用僧惠詮韻

蒼海成雪海。松聲化雪聲。蕭々還寂々。乍陰又

乍晴。晴則醫山露。陰則室山横隱見都大麓。白嶽天外擎。

丘高礙雪々紓嚴。松密碎風々引恬。松下小亭丘下屋。滿天風雪護陶潛。

小禽勢何猛。羊角截風飛。村學童蒙輩。羣行蹴雪歸。

積雪高於阜。前隣路不通。荷鋤穿草屧。踽步訪村翁。

江村來結子雲家。四壁蕭然水一涯。書卷讀過寒漏盡。悄看飛雪撲燈花。

水村山市白茫々。風卷亂雲萬木僵。却向朝暉留餘影。始看天地剖初光。

曠野一行人。乍見乍不見。雪威猶且抗。北客足以戰。

雪脚如奔浪。呼號萬木竅。野翁凭曲梧。拄頰發長嘯。

滿目凍雲亂。雪丸若急彈。萬松掀舞中。春水一川慢。

丘下絶汲道。淪氷洗老顔。朔風似童子。窓外築邱山。

絶蹤路上奈無亭。燒葉爐中纔有星。節至大寒不違約。滿空怒雪襲松扃。

廿二日朝發。此日雪少歇。

村父殷勤作屩穿。凄風獵々雪如煙。由來我不用衣股。子女呼爲赤脚仙。

三月十六日快晴。到村莊。雜詠。

清明時節犀川濱。十里平田雪若銀。勿謂日光今尚薄。殘冰解處洩青春。

漫白皚々若海濤。点青處々似谿毛。滿山積雪不埋得。不識長松幾丈高。

如削如磨白雪岑。半邊晴盡半邊陰。何知忽被斷雲礙。一線斜陽兩樣吟。

瓜圃花開獨活長。簷端梅熟紫蘇香。野人經濟風流足。不似紅塵雜糅鄉。

春霜

四月清和節。每晨霜若雪。向人搖両舌。朝冷日

中熱。

犀水。訪故人。

崔笻穿去菜花中。遙叩故人崎社東。偶倩漁舟下犀水。滿川浮片總飛紅。崎社訓佐奇茂里。俗用鷲森字。

廿六日兒健携妻子。自京城至。廿八日。拉到莊。望海。

老父携兒々挈妻。行々相語到幽栖。雞林今日屬邦域。立自北東望北西。

捕蟹。々夜逃。

遙棹扁舟水一涯。蟹奴入網爪如叉。暗中郭策成聲處。既向前川去路賒。

采松露。

松露瓏鬆色若孩。密林深處去還來。爬羅剔抉一竿把。亦是田園小理財。

漁父

落日潮頭北海濱。蜑家十戶自成隣。漁翁偶至晒漁網。就問魚蝦是故人。

午睡

南風吹至碧天開。萬岳雲飛青作堆。松杪忽然雷雨過。午睡一覺故人來。

今古塚

盧墓三年涕泗流。表章特筆在春秋。誰知遺跡爲狐窟。此物由來稱首丘。

琵琶塚

茲地高人彈琵琶。應知德化土民加。一封丘山凌雲樹。萬古清音隔世譁。

旱

連晴萬木有枯容。山上夏雲空作峯。稻稈蓋根禦炎熱。幾過三徑護孤松。今春所栽故云

露

簷滴落如雨。殘聲尚在松。銀河流至曉。不復起雲龍。

蟲

沙上移筵月下橫。滿天冷露落無聲。陰蟲報候何須曆。叢底既爲秋立鳴。

暑日二首

暑日携書江郭逃。山中不必養孤高。海風十里過松下。直到簾前起翠濤。

松影參差落日斜。松聲蕭颯海濤賒。牀頭偶有野人至。併贈黃瓜與綠瓜。

掃墓

八月十日我能諳。掃草墓前暑如淡。歸來飲水臥松下。始識老軀不足談。

十三夕看月。遙寄北涯子在總持寺

晴空一片月。境異觀亦殊。月升松影亂。月到照吾書。露落蟲聲冷。夜深浪勢虛。思詩騷客賞。無學野人疎。今宵會何處。一醉性靈攄。諸嶽三樹下。清光果何如。必應有佳作。遙寄幸起余。余獨抱膝坐。隨月入華胥。

十四日驟雨

驀地旋風西海來。亞鉛屋上雨聲摧。飛流直下一時歇。復見千山萬壑開。

十五日偶成

秋深山氣紫。天冷晚禾黃。停毫凭石榻。松下送斜陽。

驟雨漫吟

驟雨夜來撼屋至。深更怒號不能寢。天明雨脚不留痕。唯見前川上大地。滿目青山白雲横。松陰洗去落空翠。西瓜在圃無人取。盤上盛來和一醉。

看月

日落雲消淡月生。天昏松黑逐時明。今宵十三近三五。既起二千里外情。

十四日對月

前村刈稻野人歸。石上銜杯背夕暉。碧落青山暮雲外。一輪明月向西飛

暴風雨引

九月十五有霽色。我言明日不可測。去沿犀堤到村莊。落日如然暮雲黑。入夜果有暴風來。白屋震撼撲胸臆。霹靂雷轟電光開。濤聲怒號乾坤塞。迅雷風烈聖人箴。結帶兀坐氣竦息。忽爾

萬松死無聲。暴雨一霽如火熄。降心就寢胸猶驚。終夜不睡到日出。何幸前川水不增。更喜積稻堆不崩。一片板屋無所漏。三面青林影鬚髯。秋社鞴鼓動。郊頭矗立畫旗騰。窓前拄頤獨自酌。始得安眠晝枕肱。

學詩

學詩渾似學參禪。活句誰知在少年。憐殺自宗杜工部。詩家面目失超然。

學詩渾似學參禪。入室出門即可傳。柳綠花紅復何有。性情異地而同天。

學詩渾似學參禪。數有偶奇是句聯。寧棄天工覓人巧。自然言句口碑傳。

十八日晴。晚酌。用側字体

日落遠嶺紫。葦穗野岸白。老父荷稻返。下婢默執役。月上半夜後。電照五畝宅。沽酒獨自酌。氣血自暢適。一卷廣記在。若對百代客。俗慮總淨盡。腦底不見迹。

曉望

芦花如雪々如銀。朝旭三竿似夕曛。雪在遠山花在野。併爲一白滿窓雲。

秋晴

雪至越山秋氣晴。霜深江樹夕陽明。玻窓停筆無情思。唯有眼中活句生。

野意

野遠人不動。日暄赤蠻飛。此中有野意。欲寫言已非。

十月

十月山猶碧。遠村樹已紅。農人晝絢索。荒野見殘叢。

掬水菴見訪

客至采松露。折枝煮苦茶。野居隨所有。此處隔人家。

松月吟

山碧水白暮天青。野草黃落冷露零。一望蕭然天地外。夕陽已沒入窅冥。遙見山月吐玉玦。看離雲裏上天闕。色如渥丹大如盤。一轉忽爲松

間月。月明松黑四無風。白雲明月点塵空。高歌一曲酒一榼。此身飛在廣寒宮。既見天半月色白。一寸光陰眞可惜。今年今月不復還。天地逆旅日月客。嗟乎此月信堪哀。老來最覺寸心摧。昨夕有客陰不見。却喜不爲百感媒。

十一月廿一日。俳人桂井未翁諸子修亀巢忌。余有旁系之親。而有事不果往。因賦詩一章以賀。龜巢、錢屋五兵衛翁號也、

驕奢成俗國財殫。更有恩讐在勢官。莫惟一家處刑慘。万貲没收欲補殘。不知貿易營何處。開拓得允有何罪。却惟無證跡可尋。況無前例責誰在。當時無口知不言。後人有情茲招魂。年々歲々供香火。飽雪惹苔千古寃。

十八日。風歇雨霽

雨休松籟靜。風歇浪聲殘。胸底如生暇。窓間天地寬。

又

風來松籟幾回驚。雨過遙看銀竹生。今夕不知

得歸否。惟雲垂處怒濤鳴

絶句

疾風飛雨來。萬木勢驚恧。終日屋生雷。海濤山嶽隤。

引金陽畫史到村莊。

十里長堤日漸移。小春時節步遲々。山肴野蔌無餘物。唯挿霜櫨紅一枝。

犀堤

十里江干路。寒叢紅實明。看來饒野趣。何草不知名。

子夜口號

半夜推窓出。月明不見雲。盤空是何鳥。沙上影成紋。

屋白繁霜重。雲晴大月高。夜闌天地寂。野客獨翺翔。

飛霰

飛霰自西海。暗明瞬息間。餘聲猶樹杪。雲脚既前山。

十一月十一日謁大野湊祠。

史稱斯社無神殿。神德何須畫棟新。神社由來無廟宇。千年老樹是名神。又傳本在竿林濱。不識星霜幾萬春。桑變成滄此遷座。神威赫奕護邊民。降至封君增舊制。配祀右府豆籩陳。舞殿凄々奏武樂。滿都士女簇紅塵。王政維新除舊染。廟貌寥々還復眞。古來致祭々非祭。排佛斥僧始歸淳。吾幼年々過此社。爾來去國謁無因。偶隨故老問陳迹。莫怪低回俯仰頻。

十七日始雪

歲莫雪初至。霏々掠面斜。路頭猶未白。屋上点寒鴉。

寺中村道場師範碑。余一日過其村。待電車之際。始讀碑文。噴飯有此作。

非漢非和似夜禽。費財費石是何心。賴無來往野人讀。唯說村碑立樹陰。

附載

村にゆきけるとき山をみやりてよめる

野べみれば田をうちかへす空なるにまだ冬ごもる雪の山里

六月二日草庵を構へてよめる

來てもみよきゝてもみよや里住居よしは
ら雀なかぬ日はなし

麥

いつのまにか角くむ麥の色きばみ風に穂波の秋はきにけり

庭前の草を掃て

しこ草を拂除きて世に出てぬ一木の松の千代の友がき

山を望みて

こちやみてあすは雨にやなりぬらん醫王がだけに雲のかゝれる

早苗田

早苗うゑて月の半もへぬがうちに埒もみえなく早なりにけり

里の女わらはをみて

町の子と思へばさても鄙さかるあまの女のわらはなりけり

耕女をみて

今の世にそまぬはちすの花とみる里の女の慕はしきかな

釣人

釣人よいざことゝはん流れゆく水の月日をいかにみるやと

ろれの夜雨風の烈しきに月の出たるをみておもひを

月はうへ人はしたより詠めやるあひの雨風ふかずもあらなん

遠つ祖の奥つきに靈芝の生けるをみて

亡き人の名ごりなるらんくすたけの莖さ

へ長く塚に生けり

月を待ちけるほどによめる

待遠き月の雲間をはなれての後の早さぞ
おごろかれぬる

さる人によみて遣はしける

いとはずは一夜ねてみよ我宿は磯うつ波
に松風の音

秋祭

さえわたる月の出じほの里神樂賑はふ秋
は大安の杜
産土の神のみまへにつとひくる里のわら
はの賴もしきかな
打靡く里輪の田井の旗風に豊かなる世の
色ぞみえける

野花

わらやにはわらやの花ぞ咲にける宮に移
さは色やかはらん

田舍

いなかにも負けじ心のなからめや都ばかりを慕ふものかは

浮生

雨風にをやみはあれど雲霧の暗きうき世は晴るゝ時なし

暮雲

うへみれは右りにいゆくしたみれは左りにわしる夕方の雲

別業

なり所立てゝもすき屋構へても今は昔と變り果けり

たち山をなかめてよめる

しの〳〵めの雲かとみれは久方の空にたちたつ越のたち山

花

やへさくら奈良の都の昔よりこれはみかとのこゝのへの花

花ことにいへはひとへの山さくら是そ御

民の花にろありける

村にゆくときのくさ〳〵

みな月にさし〳〵青葉ははや枯れぬ彼も一

とき是もひと〳〵き

いつこかと見さくる空の青雲にしら玉つ

〳〵む雪のしら山

河つらに今もにほへり櫨もみぢ昔をとめ

し名にながれつ〳〵

ながめやる雲井しらみてふりつもること

しの雪の峯のしら山

みな月にのぼりしあとにいかはかりふり

つもりけん雪のたちやま

こぞの文月におのれ登りければなり

野菊

いろいろに代はかはれこもかはらぬは野

菊の花のみさほなりけり

松苗七百本はかり濱地にうゑてよめ

る

うゑておく小松よおのがうみの子の老て
の後の友になれかし

春

松の聲浪の音さへ靜かなり春はのとけき
物にそありける

菜花

たちあかる雲雀の聲もかをるまて菜種花
さく野はなりにけり

落花

水上はいかなる風にふぐくらむ大野湊の
花のしがらみ

草花

人にしてしかさらめやは名もしらぬ草花
にすら一さかりあり
一さかりみせてかれゆく草花の上にもを
はりありとしらすや

村莊にゆく道すがらよめる歌ども

木の葉ちるあとに殘りし柿の實も秋のな

かめの一つなりけり

秋もはやふけゆく風の水寒み尾花なみよる犀の川つら

大安野小安野もりに影さして脚もとくらく夕日春つく

たちならふ梨の木畑の蔭しめて匂ふ野菊の世にぞことなる

我もまた標野のもりの松か枝にましる紅葉をぬさとたむけむ

秋の日のならひぞは聞け雲の上に影を殘してしたにきえゆく

雪

霰ふるきのふ一夜の夢のまに近山までも雪は來にけり

朝日さす雲の戸ばりに雨すたれかけて白ゆふをちのむら山

みたる世をわすれざれとや板ふきの伏屋に玉のあられたばしる

暴風雨

天地のゆるぐばかりの雨風を戒めとする人ぞ人なる

雲井より雨脚たれてゆくみれは寒さをぞそふ金澤の里

わたのはら波さかたちて大安野小安野はらに霰とひちる

越路歌

雨あられ雪やみそれのへたてなくふらぬ日はなし三越路のうら

曉時雨

ほのほのと明ゆく空におくれじとはるゝ夜のまのむらしぐれかな

政木老人の身まかりけるによめる

泣さわぐ子らはあれとも老人のなきあとこふそさひしかりける

廿七日のいとはれたるによめる

めつらしき小春の空やくまもなし大和島

根のすみのすみまて
高山にのこりの雪とみるまてにかすむ小
春のそらの長閑さ
野路の草を乃翁におくるとてよみて
そへたる
君がためをりこしのべの一枝は秋の葉す
ゑの名殘なりけり
其返しに君ならで君ならではこなが
むれは尙忘られぬ君か心はこあるに

また
わすられぬ君がこゝろの玉章は君ならで
はとなかめこそすれ
名もしらぬ草木の色も君が目にふれては
えをやいかに增らん
霰
水にうく田のもの霰うちみれはなべてみ
それとはやなりにけり
何事にも罰じやと里の子のいへるを

きゝて

何事もまがつのつみにあひぬともしらで
日くらす神ならぬ身は

加茂直兄か詞葉直路をよみて

言の葉の直き教のしをりえて登るにやす
し加茂の神山

金陽子をあないしてよめる

はぜの枝野ぎくの花の外はなし是をさか
なにくみやはやさん

寺詣の女ともを見やりて

うちつれてけふのひよりに詣でくる里の
おみなのかへる長閑さ

自動車の主人遁けしとやらん通はす
なりにけれはよめる

をくるまの人をのせゆく影もなしけふは
いつこに身をやひくらん

常

晴るゝかと思へはくもる天地のかはるそ

らにも常はありけり

變

きのふまてそらは小春の色かへてけふは眞冬のこがらしそふく

大根の路におちたるをひろひて古への世をすてし人もすてさりき拾ひてゆかなあたらかぶらを

海鳴

空はれて風もなきよに夜もすから荒磯波のなごさわぐらん

はれぬれはみる人だにもあらしふく空にさえゆく冬の夜の月

冬のよのふけゆく月におく霜の白きをみれはわか身とそ思ふ

大根

敷島の大根のかぶら八束にもあまるそ老のいく薬なる

宋の羅景綸か山居の文を朝鮮の李寅

文か墨繪八葉に寫しけるを歌にもし
てみんとてよめる

日は長く山は靜に花ちりぬ門に水鶏の音
ばかりして

山の井の水くみあけて松ををり茶をわか
しつゝ文をみるかな

世の中の耳を洗て松蔭にいこふかたへに
兒牛なくなり

里住居わらび竹の子麥の飯あしののり物

のらぬ日はなし

世々をへし昔の鳥の跡とめて露だに殘せ
後の世のため

わくらはにことふ山の里人にことしの
田わざいかにあるやと

杖たてゝ山の端近く入相の影にたゆたふ
目もこがれつゝ

歸へるらん牛おふ笛のきこゆなり月もさ
しいる溪川の水

又明の陳眉公が文を見てよめる歌ども

世の中になほ絆さるゝ岡のべの松の木かげを隱家にして

杉の木のうづみ柱に竹の垣草のいほりの隣だになし

一坪は梅にさくらに松と竹一つほは瓜一つほは花

板壁にふるしの紙をはりつめて中に昔のふみの卷々

件なふはしらがのをみなたゞひとり園に灌けは水も汲むなり

石の牀すゑて硯の海の波わしる兎のみづくきの岡

妻もなし弟もなし琴碁なし音なふものは松風の聲

つとにおきよはにふしつゝ文をかく老の樂その中にあり

廿日村莊にゆく途すがらよめる

くれそめし麓の空に夕日さし嶺のかひま
て見えわたるかな

雲か雪か夕日をとめてしらみけり雲井あ
なたの雪のしら山

余往二于村莊一。大抵月一回。往則必淹留三四日。
觸景所得。隨筆漫錄。以投二囊中一。從是抵死。不知
積至二幾詩囊一。姑此爲第一集。以供二大方一噱。余
近者觀二浪華書林書目一。中有稱二海嶽詩囊一者。吾
謂何物學究先我着二祖鞭一。購而見之。乃奥人油
井牧山松洲遊歷之詩耳。余爲之憮然。々曰海
嶽。曰詩囊。隔世暗合。亦是一奇。時長松落雪。積
五六寸。戊辰王月二日。七十一叟稼堂跋。

317
418

昭和三年四月十日印刷
昭和三年四月廿日發行（非賣品）
金澤市長町七番丁三番地
著者　黑本植
金澤市長土塀通廿二番地
印刷人　林秀松

終